

[1]

問一	⑦ 奇妙	⑧ 顧み	⑨ 誘発	⑩ 循環	⑪ 狙う
問二	<p>供儀とは、なにもものかに利益があり、役に立つと予測・期待されるうえで、このうえなく大切な生産物を消費する行為ではなく、神の栄光にあずかる輝きをおびた仕方で消尽されるものと感受されていたということ。</p>				
問三	<p>原初的な交流・交易の一つであるクラにおいては、自ら生み出した貴重な財を、他の者に贈与するということをするが、その行為は、一方から見れば、自分の生産物や富に執着・固執しない意味を持ちうるが、他方から見れば、対抗贈与、返礼贈与の動きを誘発し、結果的にエコノミー活動を活性化させる面もあり、純粹な贈与とは言いにくいということ。</p>				
問四	人 間 に 役 立 ち 、 奉 仕 す る 事 物 に 変 え た も の を 、 自 然 か ら 与 え ら れ た 生 命 存 在 、 靈 的 な 真 実 を 秘 め て い る 存 在 に も ど す と い う こ と 。				

[2]

問一	⑦ こうせつ	⑧ へだ たつ	⑨ たずさ え	⑩ けいりゆう	⑪ あんしゆう
問二	<p>志村を忌々しく思う心は消え、彼の愉快らしい微笑に引き込まれ、彼を可愛く思うようになった。以来二人は仲がよくなり、志村の天才に服し、志村も朋友として親しみ、相伴って写生に出かけるようにまでなった。</p>				
問三	<p>自然をどう描けば自分の心を夢のように鎖ざしている謎を解くことが出来るか、ということにのみ心を奪われて、ひたすら写生にのめりこんでいたが、東京に遊学し、絵を描かなくなり、しかも、志村が十七歳で病死したことを知って、人生や生死の問題に悩まされ、暗く重い気分陥り何を描いてみる気にもならなかった。</p>				
問四	<p>志村が微笑を浮かべて写生している様子を他念なく写生していた時、それに気づいた志村がにっこりしたのに対して「自分も思わず笑った」という部分と対応している。ただ一心に写生すること、絵を描くことのみ喜びを見いだしていた少年二人であったが、それぞれの状況に変化があり、故郷の風景は元の通りであっても自分は以前の少年ではなくなり、そこはかたない物思いで心が暗くなっている。</p>				

〔3〕

問一	①	ただひととおりの春でさえも
	②	今か今かと便りが来るのを待っているだろう
問二	極楽往生を願って入水を決意したものの、いざ最期の時になり、思わず俗世のことが思い出され、心細く悲しくなった。	
問三	波間に浮き沈みする釣り船を見て、入水を決意してもなかなか入水に踏み切れない自身の姿に重なって見えたということ。	
問四	後に残してきた妻子の存在が、維盛の入水の決心を動揺させる程の、俗世での未練となり、極楽往生の妨げになっているから。	
問五	諸行無常	

〔4〕

問一	① いなや	② こひねがふ
問二	起居注に記録されている、太宗が行ったことの良い点と悪い点。	
問三	官を守るに如かず	
問四	どうして君主の行いを記録しないでしょうか、いや、その行いがどのようなものであれ、善悪全てを記録します。	
問五	自分は君主の過失を諫める諫議大夫であり、しかも君主の言行の記録をつかさどる起居でもあるが、そもそも昔から君主が法に背かないようにと願って君主の行う善悪全てを記録するのが役目なので、自らの役目を遂行し、全てを記録すべきであると考えているから。	